

様 式 C - 1 9、F - 1 9、Z - 1 9 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 2 7 年 5 月 3 1 日現在

機関番号： 3 4 3 1 0

研究種目： 研究活動スタート支援

研究期間： 2013 ~ 2014

課題番号： 2 5 8 8 4 0 7 7

研究課題名 (和文) 仮象の美学 ベンヤミンの仮象概念を軸に

研究課題名 (英文) The Aesthetics of Semblance: Focusing on Benjamin's Concept of Semblance.

研究代表者

村上 真樹 (Murakami, Masaki)

同志社大学・高等研究教育機構・助手

研究者番号： 5 0 7 0 7 1 6 4

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 400,000 円

研究成果の概要 (和文) : ドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン (1892-1940) は、その著作において美の「仮象 (Schein) 」についての考察を行っている。「見かけ」、「見せかけ」、「輝き」を意味し、両義的な価値を持つ「仮象」の語は、とりわけ19世紀ドイツ美学における重要な論点のひとつであった。本研究は、仮象についてのベンヤミンの論考を他の美学史上の言説と比較検討することを通して、近代における仮象概念の転回を明らかにするものである。

研究成果の概要 (英文) : German critic Walter Benjamin (1892-1940) makes a study of the beautiful "semblance (Schein)" in his works. The ambivalent concept of "semblance" was one of the most important issues in German aesthetics especially in the 19th century. This research project investigates a modern change of the concept of "semblance", by comparing Benjamin's theory with other aesthetical opinions.

研究分野： 美学

キーワード： 美学 哲学 仮象 イメージ ベンヤミン ドイツ 近代 メディア

1. 研究開始当初の背景

見かけは人を支配する。とりわけ美しい見かけはそうである。それはわれわれを活気づける一方で、われわれを魅了し、誘惑し、時として理性的な判断を誤らせる。だからこそ「見かけに惑わされてはいけない」という警告がさまざまな言い換えを通して繰り返し発せられてきたのであるが、そのこと自体が見かけの問題がいかに厄介なものであるかを雄弁に語っている。

ドイツ美学においては、この問題は「仮象 (Schein)」という語を用いて論じられている。「見かけ」、「見せかけ」、「輝き」を意味し、両義的な価値を持つこの語は、啓蒙主義の時代においては概して否定的な価値を与えられてきた。しかしながら 19 世紀以降、仮象は美と密接に関係づけられることによって、その肯定的側面が取り上げられ、さかんに論じられるようになる。本研究は、こうした「仮象」をめぐる論争史を美学的観点から整理し、美における見かけの問題を探究するものとしての「仮象の美学」を構築する試みである。

そのための基準点となるのが、ドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン (1892~1940) によって成された一連の仮象批判である。前期の論考「ゲーテの親和力」(1921/22) においてベンヤミンは、仮象をめぐる古典的論争に参入し、美と仮象に対する徹底的な批判を展開した。それはベンヤミン自身が言うように、古典の「注釈 (Kommentar)」ではなく「批評 (Kritik)」を意図したものである。そしてここで提示された仮象概念は、「アウラ」や「アレゴリー」の概念へと形を変え、「複製技術時代の芸術作品」(1935/36/39) をはじめとする後期のメディア論へと引き継がれてゆく。「近代」の原型を生産様式やメディアの変化、そしてそこに暮らす人間の知覚そのものの变化から読み解こうとするベンヤミンのメディア論は、映画の誕生によって人間を取り巻くメディア環境が大きく変化した時代の貴重なドキュメントとしてとらえることができる。「仮象」の概念はその哲学的基盤となるものである。それはインターネットをはじめとする新しいメディアの普及によって大きく変貌しつつある現代のわれわれの生活を考察する上でも、重要な示唆を多く含んでいる。本研究は、ベンヤミンの仮象概念を通して美学史の流れを逆照射することによって、「仮象」という語のとらえられ方の変遷、とりわけ近代における決定的な転回を明らかにし、従来考えられてきた美学史を「仮象」の概念を軸として再構築することを目指すものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「仮象」の概念を軸とした美学史のとらえ直しを行うことである。とりわけベンヤミンの仮象についての論考の

読解を通して、近代における仮象概念の転回を明らかにする。それは写真や映画といった新しいイメージ群の登場が人間の知覚に与えた影響を精査することであり、同時にまた、そのような知覚によってとらえられた「仮象」が近代以前の古典美学によってとらえられた「仮象」とどのように異なっているのかを明らかにすることである。現代においてもなお重要な論点である「仮象=見かけ」の問題についての考察を通して、美学の持つアクチュアリティを引き出し、美学研究ならびにベンヤミン研究に寄与することを目指す。

3. 研究の方法

(1) ベンヤミンの仮象概念を精査するために、ベルリンのヴァルター・ベンヤミン・アルヒーフでの資料収集を行った。当アルヒーフではベンヤミンの未出版のメモ・草稿類が閲覧可能であり、また世界各国で出版されている先行研究の収集をも行っているため、ベンヤミン研究の全体像を把握することができる。ここで集めた資料の読解を通してベンヤミンの仮象概念についての文献学的基礎付けを行った。

(2) 当時の社会状況ならびにベンヤミンの生活圏の同定を行った。とりわけ彼の故郷ベルリンと亡命の地パリについて、当時の社会的状況とその地理的状況を、文献の読解とフィールドワークを通して明らかにする作業を行った。ベンヤミンの同時代的批評活動は彼が身を置いた時間・空間と不可分である。戦間期ヨーロッパという切迫した時代状況の中で手探りで進められたベンヤミンの思索を読み解くためには、そのような作業が不可欠なものとなる。

(3) ベンヤミンの仮象概念と他の美学的言説との比較検討を行った。とりわけカント、シラー、初期ドイツ・ロマン派、ゾルガー、ヘーゲル、ニーチェ、コーエン、アドルノの美の理論との比較を通して、ベンヤミンの美学(あるいは美学批判)を明らかにすることを試みた。それはまた、従来の美学を批判的に再構築する作業でもある。ベンヤミンの美学的思索は、美学という学問領域の内部に確固とした場所を占めることを目指すものではなく、逆に美学的な諸前提に亀裂を生じさせることを意図したものであるととらえられるべきだからである。

4. 研究成果

ベンヤミンはゲーテの小説『親和力』に登場する三人の女性登場人物「オットーリーエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」に注目し、それを仮象に対する三つの異なった立場として位置づけている。そこでは、もの静かでひかえめなオットーリーエには「消えゆく仮

象」若く潑刺とした魅力をこれ見よがしに振りまくルツィアーネには「勝ち誇る仮象」、恋人から眺められることを拒否して合一を求めるノヴェレの娘には「表現をもたぬもの」という名が与えられている。本研究は、ここに見られる三つの区分を基盤に、それを他の美学史上の言説と比較することを通して、「否定美学」とも「救済の美学」とも呼ばれるベンヤミンの美学（美学批判）を叙述しようとするものである。そこからは以下のような結果が導かれた。

（１）オットー・リーエの身にまとう「消えゆく仮象」は、ゲーテやシラーによる古典主義的仮象概念、あるいはまたゾルガー、ヘーゲル、シェリングによる観念論的仮象概念と重ね合わせることができる。その特徴としては、そこにおいては「美」が「道徳」や「真理」と関連づけられている（あるいは同一視されている）ということが挙げられる。ベンヤミンはそのような美の概念に対しては批判的であり、美と道徳・真理との関係を切断し、仮象の価値を切り下げを試みている。そのような姿勢は、ベンヤミンの後期思想における「アウラ（オーラ）の凋落」の問題へとつながってゆくものである。

（２）ルツィアーネの身にまとう「勝ち誇る仮象」とは、純粋な見せかけとしての仮象であり、それはニーチェの仮象概念、あるいはボードレーンによる美の概念と重ね合わせることができる。ベンヤミンはそれを仮象としてではなくアレゴリー（寓意）としてとらえる。それは美を「意味する」ものとしての美のアレゴリーである。ベンヤミンにとっては人物や芸術作品の持つアウラとは近代化の中で消えゆくものであり、それに代わって重要となるのが表面的な記号としてのアレゴリーなのである。このことは後期ベンヤミンにおける写真論・映画論を考える上での重要な基盤となる。さらには現代的な文化事象全般を理解する上でも、不可欠な視点であると言えるだろう（たとえば現代日本における「キャラ」の概念はアレゴリーの現代的なヴァリエーションである）。

（３）ノヴェレの娘に見られる「表現をもたぬもの」という契機は、美学的文脈においてはカントの「崇高」概念と重ね合わせることができる。それは震撼を伴った中断の契機である。しかしその他にも、それはロマン主義的「批評」概念、ローゼンツヴァイクによる「奇跡」概念、ローザ・ルクセンブルクによる「革命」概念との関連性が指摘できる。それらはみな、仮象を切り裂いて現れる一瞬の停止の契機であり、「美」や「歴史」といった神話的秩序からの解放としてとらえられている。このように内部的な仮象世界に外部的中断（崇高）を対立させる思考方法は（それは一種のメシアニズムである）現代の社

会批判の文脈においてもしばしば見出される。

以上の考察から、本研究は、ベンヤミンの美学が「仮象」の概念を軸として美や芸術に対するメディア論的アプローチを図るものであったと結論づける。それはボードリヤールのシミュラクル概念、そしてマクルーハンのメディア論とも深く関わるものであり、急速な変貌を遂げつつある現代のメディア環境を考える上でも重要な基盤を提供するものである。近代におけるテクノロジーの発展、とりわけ機械的な複製技術の発展は、人物や事物の持っていた神秘性や統一性、自己同一性を奪う。それに代わって重要となるのが表面的な記号としてのアレゴリー（あるいは「キャラ」）であり、そこにおいて人物や作品の持つ統一性は断片へと分解される。しかしベンヤミンはそのようなアレゴリー的な「遊戯（演技）」を肯定的なものとして評価した。それは当時進行していたファシズムによる「アウラの捏造」を阻むための企てとしてとらえうる。そしてそのような遊戯の果てにベンヤミンが待望したものが、あらゆる仮象の中断としての「救済」の契機なのである。

「オットー・リーエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」という三幅対は、ドイツ観念論美学がその考察の対象としてきた「美、芸術、真理」という統一体、スーザン・バック＝モースが言うところの「哲学的三位一体」をばらばらに解体するものとして読むことができる。ベンヤミンはオットー・リーエの体現する美しい仮象を芸術の領域から締め出す。それによって近代の芸術はルツィアーネ的なアレゴリーによって担われることになる。さらに彼は真理をノヴェレの娘の行為の中に見出すことによって、それを美や芸術に対する干渉として位置づける。つまりここにおいて、美学の考察対象とされてきた「美、芸術、真理」という三つの要素は、「オットー・リーエ、ルツィアーネ、ノヴェレの娘」の三人によってそれぞれ分割して担われることになるのである。ヘーゲルにとってこの三つは一体のものであったが、ベンヤミンの場合、それは断片へと粉碎される。しかしながら断片化されたそれらの要素は、まさにそのことによって肯定的な価値を与えられる。この三人は決して共同戦線を形成したりはしない。オットー・リーエ（美）とルツィアーネ（芸術）は仇敵とも言える仲であり、ノヴェレの娘（真理）に至っては他の二人のことをまったく知りもしない。にもかかわらず、ベンヤミンにおいては、この三人はそれぞれが別個にその働きを全うする。いわば彼女たちは全体性に対するゲリラ戦を展開するのであり、ここにこそベンヤミンの思考の際立った特徴が表れている。そしてこのように「美、芸術、真理」を分解してとらえ直す視点は、現代の芸術ならびに文化事象一般を理解する上でも、示唆

に富んだものであると言えるだろう。

なお、本研究の成果は『美の中断 ペンヤミンによる仮象批判』と題して書籍のかたちで発表されている。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計2件）

岡林洋編著、田中圭子、アラン・スコット・ペイト、是澤博昭、清瀬みさを、村上真樹、平山敬二、越前俊也、田之頭一知、竹中悠美、三木順子『カルチャー・ミックス 文化交換の美学序説』、晃洋書房、2014年、総226頁（担当執筆箇所：第二章第4節「ペンヤミンから見る現代日本文化」、88-103頁）。

村上真樹『美の中断 ペンヤミンによる仮象批判』、晃洋書房、2014年、総207頁。

6．研究組織

(1)研究代表者

村上 真樹（MURAKAMI, Masaki）

同志社大学・高等研究教育機構・助手

研究者番号：50707164